
少年陰陽師～永遠に続く誓い～

宵千鬼江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年陰陽師〜永遠に続く誓い〜

【Nコード】

N2977Z

【作者名】

宵千鬼江

【あらすじ】

晴明と昌浩が現世をさつてから1000年余りが過ぎた。この二人に心を開いていた十二神将騰蛇こと紅蓮は、再び心を閉ざしていた。晴明と昌浩の願いで今だ安倍家に仕えているものの、紅蓮の神気の強さにおびえる者ばかりだったからだ。そんな紅蓮を、道反の大神と知り合いだつたため、時折現世に降り立ち、術を使うことまで許された晴明と昌浩は心配しながら見ていた。しかし一向に紅蓮が心を開かないので、晴明と昌浩は道反の大神に頼み込み、術を使って昌浩を現世に戻すことにした。

こうして、安倍晋浩は再び現世に生を受けた。

再会（前書き）

初兆戦です。少年陰陽師の二次創作。途中で挫折するかもしれません。んが、よろしくお願いします。

再会

異界に閉じこもっていた十二神将騰蛇こと紅蓮は、背後に神気を感じた。

< 勾、何の用だ。 >

< なんだ、用が無ければ来てはだめなのか？ここは私たちの異界だぞ >

< 用はないのか。 >

< 昌明に子供が生まれた。見に行ってみろ。 >

< どうせおびえて泣くに決まっている。 >

< 行くだけ行ってみろ。あいつの霊力が珍しくてな。青龍まで見に行っている。 >

< 青龍まで？わかったよ。行けば気が済むんだな。 >

< そうだ。 >

仕方なく、紅蓮は人界に顕現した。その部屋ではぐっすり寝ている赤子を取り囲んで十二神将がいた。

紅蓮が顕現したことに気がついた十二神将たちは紅蓮が予想していた通りの反応をした。

太陰は隣にいた百虎の後ろに隠れ、青龍は即座に異界へ戻った。多少態度が軟化したものの、1000年前から十二神将たちの紅蓮に対する接し方は変わらない。それら全ての反応を黙殺した紅蓮の背後にまたもや神気を感じた。

< 勾、帰っていいか？ >

< まだ赤子を見てないだろう。見てたらお前はそんなことは言わない。 . . . ほれ。 >

< お、おい？赤子は嫌いだとあれほど . . . >

< その霊力、懐かしくないか？ >

< . . . !？昌浩の霊力にそっくりだ。 >

< そうだ。泣いてもいないだろう >

<!!!>

心底驚いている紅蓮を見ながら、十二神将たちも同じことを考えていた。

そこに、昌明が来た。

<お、昌明、この子の名前はなんと言った？>

<ああ、勾陣、十二神将の皆様もおそろいで。>

紅蓮を恐れている昌明は言葉遣いに気をつけながら、赤子の名前を言った。

<昌浩と。>

<<<<<<は?>>>>>>>>

<<<<え?>>>>

異口同音に声を上げる十二神将たちの後ろで、紅蓮は声も上げられぬほど驚いていた。

親ばかり(前書き)

少し前置きが長くなってしまいました。少年陰陽師、めげずに二作目です。

親ばか

昌浩の世話をしていた紅蓮は、1000年ほど前のことに想いを馳せていた。名前も同じ、霊力も同じ、もしかしたらこの子は昌浩の生まれ変わりではないかと十二神将は期待していた。しかし、陰陽術を教えようにも今は平成、術など必要ないからと最近は何も受け継ぐことをせず、見鬼の才だけが受け継がれている状態になっており、十二神将も呪文を知っていても使うことはないのも術の発動の仕方を教えることはできなかつた。悩む十二神将の中でただ1人、ここにいてくれればそれでいいと、紅蓮だけが昌浩を親のように世話していた。

<どうしたんだ昌浩、そんな顔して。>

<れ〜ん、ボ〜つとしてた。だいじょうぶ？>

<ああ、すまない、大丈夫だ。>

<れ〜ん、れ〜ん、そといこ。>

<外？危くないか？>

そこに、勾陳が顕現した。

<私とお前がいれば問題ないだろう。>

<それでいいのか？>

<闘将が二人だぞ！？この時代は害をなす妖怪なんぞそうそういない。大丈夫だ。>

<でも万が一ということも・・・>

<大丈夫だ。そうこういつてる間に昌浩が出て行くぞ。>

<何！？>

見ると、昌浩が裸足のまま外へ出て行くこととしていた。

<昌浩、勝手に出て行くんじゃない。驚いたじゃないか。>

<れ〜ん、あそぼ。>

<わかつたよ。>

昌浩に引かれていく紅蓮を見ながら、勾陳はつぶやいた。

< まったく、親ばかりにもほどがあるな。 >

勾陳の独り言にその場に隠行していた十二神将たちは大いに頷いた。

親ばかり(後書き)

誤字脱字、あつたら教えて下さい。途中で訂正したりするかもしれませんが、その辺はお願いします。

お供（前書き）

三作目。まだまだめげずに頑張ります。

お供

昌浩が生まれてから5年がたっていた。この時代の七五三だ。七五三を終えてお疲れの様子で帰ってきた昌浩は部屋で紅蓮と休憩していた。

<ぐれん、あれなに？あれだよ、あのくろいの。>

<昌浩、あれが見えるのか？>

それはとても力の弱い妖怪で、相当の見鬼の才がなければ見えないぐらいの雑鬼だった。

<え？だつてあそこにいるじゃない。いないの？>

<いや、いるにはいるが・・・>

そこに、十二神将勾陳と六合が顕現した。

<昔の昌浩みたいなことになっているな。>

<勾か。ああ、しかし今回は見鬼の才を封じる術はないぞ。>

<そうだな、昔なら晴明に頼めたんだがな。>

そこに、ずっと黙っていた寡黙な十二神将、六合が口を挟んできた。<別に封じる必要がないだろう。今は昔みたいに妖怪が闊歩していないし、万一いたとしても騰蛇がいれば大丈夫だろう。>

<それもそうだな。だが騰蛇なら俺1人では心配だなどとはざきそ
うだ。>

<おい勾、どういうことだそれは。俺1人では心配だろう、どう考
えても。>

<お前は十二神将最強なんだから大丈夫だろ、どう考えても。>

<俺は勾陳に賛成だ。>

そこに、ずっと隠行していた玄武が顕現してきた。

<我も勾陳に賛成する。それでも心配なら六合と太陰に一緒にいて
もらえばいいと思うが。>

そこに名指しされた太陰が慌てて顕現してきた。

<ちよつと待ちなさいよ玄武、六合はともかくなんで私なのよ。勾

陳が行けばいいじゃない。>

<風流と風読みに必要だ。>

<だったら百虎でもいいじゃない。>

<太陰の姿かたちは子供だ。昌浩に近い。>

<で、でも……>

紅蓮が恐い太陰は必死ににげようとする。それを見かねた勾陳が折れた。

<わかったよ。私がつくよ。>

結局、昌浩のお供は勾陳と六合に決まった。

お供（後書き）

誤字脱字、気付いたらお知らせください。

小学校（前書き）

少年陰陽師二次創作4作目。まだまだめげずに頑張ります。

小学校

昌浩は今年で6才、今日から小学校に通うこととなる。重いランドセルをもって、昌浩は白い物の怪と共に家を出た。

<もっくん、行こう。>

<おう。>

<もっくんさあ。>

<ん？>

<学校ではあまり目立つ行動しないでよ。見鬼の才がある人がいたら大変だから。>

<大丈夫だって。俺が見えるくらいの見鬼はそうそういないから。>

<でも、勝手な事されると気が散るんだよね。>

<大丈夫、大人しくしてるって。>

<絶対だよ。>

そして、学校が始まり、最初の授業。

<は〜い、ここがわかる人〜。>

<<<<は〜い。>>>>

安倍家でさつさと知識を神将たちに叩き込まれていた昌浩には朝飯前の問題だった。と、そこに物の怪の合いの手が。

<こんなの昌浩にはどーってことない問題だろ。別に手を上げる必要ねーんじゃねーか？>

<そんなことないよ。授業なんだからちゃんとやらなきゃ。って言ってもっくん、机の中から出てこないでっば。>

<いいじゃねーか。どーせ俺が見える人はいないんだし、お前が小声で話せばばねーって。>

<そっついう問題じゃないの。>

<じゃあどっついう問題なんだよ。>

<俺の気が散るんだよ。呼ばれてるのに気付かなかつたりしたらどうしてくれるんだよ。>

<そんな時はそんな時で怒られておけよ。>

<怒られんのは俺なんですけど。>

<知るか。>

<ちょっと安倍君！さっきから呼んでるんだけど。何ボウっとして
るの？>

<す、すみません。>

<あなたはボウっとしてることが多すぎます。後で私のところへ来
なさい。>

<はい……。ほら、怒られたじゃないか。今回で何回目だよ。

初授業だつてのに。>

<俺は知らねーぞ。お前の集中力の問題だ。>

ちよっともっくん！！と叫びそうになるのを我慢して、昌浩は物
の怪に半眼を向けたが、当の物の怪はというと、前足で器用に首の
周りをワシヤワシヤとかき回していた。

小学校（後書き）

誤字脱字あれば教えてください。

卒業式（前書き）

まだがんばれそうです。 5作目。

卒業式

昌浩は今日は待ちに待った卒業式。今日でランドセルを持って小学校に投稿するのは最後。相棒の物の怪のもつくんはもちろん、十二神将六合、勾陳、天一と、昌浩の父親の昌明と母親の露美がついてきた。

<今日まで長かったな。俺は嬉しいぞ。弟子が独り立ちするみたいで。>

<弟子入りした覚えはない！>

<だから例えだよ例え。>

<どんな例えだよ。>

そんなやり取りを見ていた勾陳と六合は物言いたげな顔で見守っていたが、口を挟むことはしなかった。

<<キンコーンカーンコーン卒業生の皆さんは至急体育館にお集まりください。キンコーンカーンコーン>>

<だってよ。行ったほうがいいんじゃないのか？>

<そうだね。でももつくん、式にまでついてくる気？>

<大丈夫だって。俺が見えている人なんかそうそういないって。>

<それはそうなんだろうけど。絶対にいないとも限らないし。>

<だったら勾と六合も同じだろ。>

<あの二人は常に隠行してるしもし顕現したとしても服装が変わってるだけで少し変な人にしか見えないって。・・・多分。>

その後に分多分ということを入れたのは、誰がどう見てもあの服装と背とその他諸々は人間に見えないからである。

<まあ、人じゃないしな。>

<そうなんだよね。>

そうこういつてる間に体育館に着き、式も始まった。式の時々に物の怪が横で騒いでいるのを除けば、式は無事に終わった。1ヶ月後には昌浩も中学生である。

卒業式（後書き）

誤字、脱字、あれば教えて下さい。

覚醒（前書き）

やっと昌浩覚醒です。六作目、少し長いです。

覚醒

昌浩は明日から中学生である。昌浩は相棒の物の怪と十二神将勾陳、六合を連れて貴船の本宮を目指していた。それも真夜中に。安倍家では、子供が中学生になるとなぜか真夜中に貴船の祭神にご報告するという儀式があるからです。

<えーと、私は明日より中学生になります。加護をお願いします。>
<えーとって何だよえーとって。相手はへそを曲げたら厄介な神5指に余裕ではいる神なんだぞ。>

<騰蛇、それをここで言うのも控えたほうがいいぞ。>
そんなことを言っている昌浩、物の怪、六合、勾陳の話し声をさえるように、山の反対側から爆発音が聞こえてきました。

<なんだ？なんなの、今の音？>

<わからん、わからんが行ってみよう。>

<う、うん。>

それだけの会話を交わして、昌浩と勾陳と六合と物の怪は山の反対側に急いだ。ここでは、妖力はさして強くないものの、数がとても多い妖がうろつろつしていた。その数の多さにさしもの十二神将も絶句した。

<昌浩、お前は下がっている。>

<う、うん。>

それだけの会話を交わすと、物の怪は瞬く間に長身の青年に変化した。この青年こそ十二神将最強にして最凶の騰蛇。また、許されたものだけに呼ばせる名前は、

<紅蓮>

紅蓮は目で応じると、妖の所へ駆けていった。勾陳と六合も同様だった。三人の神将は次々に妖をなぎ倒していったが、数の多さにきりがなかった。どれほどそうしていたか、妖が不意に三鬪将の間をすり抜けて、昌浩に襲い掛かった。

<<<しまった。>>>

しかし、この距離では絶対に追いつかない。三闘将があせる前で、不意に昌浩は瞠目して、倒れかけた。おかしい、妖はまだ手をだしていない。急に昌浩はシャンとたつたと思うと、訝る紅蓮、勾陳、六合の前で、教えてもいない刀印を結んで、教えてもいない真言を唱え始めた。

<オン、アビラウンキャン、シャラクタン！ナウマクサンマング、バサラダン、カン！>

妖に無数の亀裂が生じた。昌浩は刀印を構えると、一気に叩き落した。

<降伏！>

妖の体が木っ端微塵に砕けて四散する。それを見た無数の妖達が目散に逃げて行った。三人の神将は、息を呑んだ。が、すぐに気を取り直して昌浩に詰め寄った。

<どういうことだ、なぜ教えてもない陰陽術を使えるんだ。答えろ、昌浩！>

<いや、そんなこといわれても俺説明苦手なんだって。>
さらに問い詰めようとした三闘将の真上に、絶大な神気が降り立った。みると、そこには白銀の龍が人身を取っているところだった。

この方こそが、貴船の龍神である。

<ほおう、ようやく目覚めたか。安倍昌浩。>

<はい、お久しぶりです。高於の神。>

紅蓮たちは訳のわからないままそこに呆然と立っていた。目覚めたとはいつたい、それよりもなぜ高於の神の名を知っている。

<どういうことだ、俺達の納得のいく説明をしる。>

<だからおれ説明苦手なんだって。>

<ならば私が説明しよう。>

神将たちはまたもや啞然とした。この声は、いや、そんなばかな、だってあいつは1000年以上も前に……。だが、そんなことを考えていた神将たちの思考を昌浩の一言が打ち消した。

< じい様。 >

神将たちは、その姿を見て絶句した。が、その姿は紛れもなく神将
たちの最初の主だった。

<<< 晴明!!!!!! >>>

覚醒（後書き）

誤字脱字、あれば教えて下さい。

俺のため（前書き）

また長くなってしまいました。7作目、開幕です。

俺のため

十二神将たちは啞然としていた。まず何かしら雰囲気が変わったと思われる昌浩、傷だらけで上の空の三鬨将たち、そして1000年以上前に死んだはずの彼らの最初の主、清明。なぜか横にいる貴船の祭神をほっというても不可解なことが多すぎる。

<これはどういうことか説明してくれ、騰蛇、勾陳、六合。>

上の空の紅蓮を引き戻したのは、困惑が少し少ない天空だった。

<わからん、俺達だって不思議なんだ。>

<それはそうだろうな。だから私が説明すると何度も言ってるだろ。>

<なら早いとこ説明してくれ。頭が爆発しそうだ。>

<はいはい、じゃあ、皆が座れるところ・・・リビングでいいですよね、じい様。>

<ああ、別に構わんぞ。>

<じゃあ行こう。>

<あ、ああ>

訳のわからないまま十二神将たちはリビングに誘われていった。

<え〜と、まずこの昌浩は昔の昌浩の生まれ変わりだ。>

<そうなのか。霊力が同じだからそうじゃないかとは思ってたんだがな。>

<そうだ。だが私は黄泉から魂魄を飛ばしているから実態ではないぞ。だから姿も二十代の頃のものだろ。>

<その姿になる必要あったんですか？確か実態で降りることも許されてませんでした？>

<そうなんだが、この姿をとるのが夜に出る時の癖になってしまったな。>

<ちょっと待った。許されたって誰にだ？>

<道反の大神。ほら、俺達道反の大神の知り合いだっただろ。だから

ら時々現世に降りたり、術を使うことまで許してくれたんだ。だからもっくん達のこともずつと見てたんだよ。>

唾然となっていた十二神将たちはまた一段と増して唾然とした。

<こらこら、そんなに驚くんじゃない。まあ、今日まで姿を見せることだけは禁じられていたしな。>

<今日は何の日なんだ？>

<昌浩が覚醒する日だ。私の術で昌浩の記憶を一時的に消していたんだよ。生まれたばかりの赤子が突然お前達のことを言ったりしたら驚くだろ。それが解かれるのが今日だったんだ。それが解かれたら姿も見せていいと言われていたんだ。>

<それにしてもいいタイミングで妖があらわれたな。>

<ああ、あれは高於の神とどうせ昌浩が覚醒するなら面白いほうがいいと話し合って決めたんだ。>

<ちよつと待て、そのせいで俺達は傷だらけになったってのか？> 明らかに半眼になる物の怪に晴明は飄々と言つてのけた。

<そうだよ、普通に昌浩が教えてもない陰陽術を使ったら驚くだろう。>

<驚くよ、驚いたからこうして問い詰めているんだろ。>

<そうだな。ということ、昌浩は昔の昌浩だし、私はちよくちよく顔を出しに来るから。いちいち驚かんでくれよ。>

<慣れたら大丈夫だ。それより、そもそもどうしてお前達は昌浩を甦らせたんだ？>

<それは、もっくんが落ち込んでたからだよ。それで心配になつてじい様の術で現世に戻ったんだ。>

昌浩は物の怪の白い毛並みをなでた。十二神将は大体事情がわかっていつもの平静さを取り戻しつつあったが、それとは対照に物の怪は絶句してされるがままになっていた。俺のため？？

<ところで、高於の神はどうしてここに？>

<面白そうだったからだよ。とうの昔に死んだはずの安倍晴明が本宮に来た時には驚いたがな、事情を聞いて面白そうだから安倍晴明

とあの策を練ったんだ。あの妖も私とこれが脅して従えさせたものだよ。>

<ちよつと、私を入れないでくださいよ。全部あなたがやったのでありませんか。私は見ていただけですよ。>

そんな会話を最後に、晴明と高於の神は帰り、覚醒したばかりで疲労気味の昌浩は床にいた。

俺のため（後書き）

誤字脱字、あれば教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2977z/>

少年陰陽師～永遠に続く誓い～

2011年12月18日01時46分発行